内府様御麻疹御快然、御酒湯被爲召候付、明十三日、山王江御名代以西丸御側衆御備物有之候間、可被得其意候、

十一月十二日

〔武江年表十一〕文久二年六月、炎旱數旬に及べり、夏の半より麻疹（アカモガサ）世に行れ、七月の半に至りては彌蔓延し、良賤男女、この病痾に罹らざる家なし、此病夙齡の輩に多く、天保七年の麻疹に、かゝらざる輩なり、強年の人には稀なり、凡男は輕く女は重し、それが中に、妊娠にして命を全ふせるもの甚少し、産後もこれに亞ぐ、後に聞けば二月の頃、西洋の舶崎陽（ナガサキ）に泊してこの病を傳へ、次第に京大坂に弘り、三四月の頃より行れける由、江戸に肇りしは、小石川某寺の所化何がし二人、中國より江戸に來りし旅中に煩ひて、四月の頃、病中寺内へ入、闔山の所化に傳染しけるが、夫より五月の末に至り、少し行れ、六月の末よりは次第に熾にして、衆庶枕を並べて臥したり、文政天保の度にかはり、こたびは殊に劇して、良醫も猥に藥餌を施す事あたはず、或は吐し、咳嗽を生じ、手足厥冷に及ぶ、烏犀角は内攻を防ぐの藥なれど、用ふる事度に過れば、逆上して正氣を失ふに至るとぞ、固より熱氣甚しく、狂を發して水を飲んとしては駈出し、河溝へ身を投じ、亦は井の中へ入て死るもありし、醫師は巧拙をいはずして、東西に奔走し、藥舗は藥種を擇ばずして、售ふに遑なく、高價を貪れるも多かるべし、去かるに醫生も藥舗も、又續て同病に罹れるも尠からず、製藥店招牌をかゝげても售ふもあれど、症分によりては應驗等しからざるもあるべし、七月より別て盛にして、命を失ふ者幾千人なりや量るべからず、三昧の寺院去る午年、暴瀉病流行の時に倍して、公驗（キッテ）を以て日を約し、茶毗の烟とはなしぬ、故に寺院は葬式を行ふにいとまなく、日本橋上には一日棺の渡る事、貳百に暨る日もありしとぞ、又七月の半よりは、暴瀉の病にまさりし急症やむ者多くこれあり、こは老少をいはず卽時兆し、吐瀉甚しく、片時の間に取詰て、救藥すべからず、死後總身赤くなる